

続天保の人びと

五所固山

ぐらし

かつおきんや作

横山俊夫画





N. D. C. 913 /280P /23cm

かつおきんや作品集 4

■ 五箇山ぐらし ■

— 続・天保の人びと —

一九七九年六月五日 九版発行

著 者 かつおきんや

発行者 東 政 彦

発行所 株式会社 アリス館牧新社

東京都千代田区神田錦町三ノ二
電話 (二九三) 九七五五

印刷 太陽印刷

製本 太陽印刷

・乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

©Kinya Katsuo 1972 Printed in Japan

(分) 8393 (製) 08004 (出) 0144

越中^{えつちゆう}の国 五箇^ご山^{やま}

そそり立つ山並^なみの底をはしる庄川^{しょうがわ}の急流に

そつて点^{てんざい}在^{ざい}する 合掌^{がっしょう}作りの家々

今も そこは秘境^{ひきよう}とよばれる

その辺境^{へんきよう}の地へ

心ならずも送りこまれた一群^{いちぐん}の人びとがいた

天保^{てんぽう}十年

—— 今を去る百数十年前のことである



もくじ

第一章 白い峠

とうげ

1 夫婦滝 めおとだき 2

2 筑子節 こきりこぶし 23

3 かごの渡し わた 45

第二章 新しいくらし

がつしやう

1 合掌作りの家 68

2 春一番の仕事 89

3 高い床下 ゆかした 111





第三章 ナギ畑のみのり

1 行かすの谷 134

2 加賀^{かが}からのたより 157

3 仏^{ほとけ}さまの心 177

第四章 「つもごり」まで

1 塩硝^{えんしょう}作り 202

2 おばあ^{おばあ}の死 221

3 まちかね^{まちかね}たうぶ声 243

あとがき 264



第一章 白い峠

とうげ



1 夫婦滝



天保十年三月三日（一八三九年四月一五日）朝早く、まだ夜のあけきらぬうす暗がりのなかで、越中の国、城端町善徳寺の南よりの小さな裏門が、ギギギギと、重い音を立てて開かれた。そして、おし殺した、

「さあ、さっさと歩け。それ、それっ。」

という、しわがれ声にせき立てられて、肩をすばめた人影が三十いくつ、ぞろぞろとつながって、その門から出てきた。

なわこそつけられていなかったが、わらぐつをはいたその歩きぶりは、どれもみな重く、いかにも囚人らしく見えた。

男ばかりではない。赤ん坊を背にくくりつけた若い母親もいたし、五つか六つほどらしい、おさ

ない子どもの手をひいた、おさげがみの女の子もいた。ひどく腰のまがった老婆も、つえにすがって歩いていた。

「なむあみだぶ、なむあみだぶ。」

つぶやきのような念仏が、そこそこからもれていた。

越中の平野を、海に向かって開いた扇とすれば、城端は、そのかなめに近い山のきわにできた町で、昼は、機の音もにぎやかな、活気に満ちた町であった。だが、このとき、人びとは、目ざめの前の春のうまい眠りにひたりきり、町はしずまり返っていた。

ときをつげるにわたりの声だけが、あるいは遠く、あるいは近く、やがてくる朝日をよびつづけている。その声がはこぶのか、すぐ目の前にそびえる灰色の山々から吹きおろしてくるあかつきの風は、春とは名ばかりに、みなのはく息を白くかたまらせた。つえをにぎる老婆のひびわれた手はしびれ、おさな子の小さな手はまっ赤にはれ、女たちのしもやけはたちまち痛みを倍にする。

だが、前後についている送り役の足輕は、立ちどまることも許さない。

大工町から急な坂をおりて右へおれると、東新田町の、低いながらしっかりした作りの商家が、びっしりと両側につづく。糸を買い、絹を売る店がもつとも多く、あとは近在の百姓相手の店ばかり。昼は人通りのたえまなく、つい数日前には、「おおつもごり」といって、毎年きまった大市が立ち、五箇山からの人がきて、夜通しにぎわった所だ。

一度おりた坂が次第にゆるやかなのぼり坂になった所で、右手に、石地藏が立っている。五箇山

へ通ずるこの道に、いつ、だれが立てたものかわからぬが、おそらくは悲しい物語がまつわっているにちがいない。その前へ通りかかった一行のなかから、思わず数人がその前かけよって、両手を合わせ、ひざまずいた。その善男善女の肩へ、足輕の手がのびる。

「こら、早う行かんかい。お彼岸の寺まいりとちごうぞ。」

一行は、ひきもどされた人びとをだまってつつみこみ、もくもくと歩く。小さな川をこす。ごくならかな石段がある。それをのぼって、少し行った所に、黒い木の柵がある。城端と五箇山の道をふさぐ閑所だ。

手前の番小屋の前で、年とった番人が待ちかまえていて、先頭の足輕に声をかける。

「いやあ、ごくろうさまで……。」

前もって知らされていたのだろう。ていねいに礼をするのを、足輕は、黒い笠をちらつと動かしただけで、返事もせず、歩みもとめない。たしかにこんな年寄りから子どもまで入れた百姓の罪人どもを、こともあろうに五箇山までつれていくという、とんでもないびんぼうくじを、どうして自分がひいてしまったのか、残念でたまらないといった顔つきだ。

柵をすぎると、左右に、わらぶきの百姓家が五、六軒ある。すぐそこに見える町の家々とくらべて、なんとみすばらしいことだろう。その屋根ごしに、いかにもびょうぶのようなかつこうでそびえている、高い山々がある。なかには、早くも朝日をうけて、その頂上の東側を、赤く輝かせている峰々もあれば、黒っぽくしずまっている峰々もある。袴腰山とよばれる、山頂の平らな山の

色が、とりわけきわだっている。

右手を振り返れば、はるかに、加賀との境を作る医王山の峰々が、七分以上まっ白くおおった雪を、金色にそめて、さっそうとそびえている。あの山の向こうに、一行の故郷、今はすっかり遠のけられた村がある。

この一行は、昨年夏、加賀の国石川郡一帯の田が、いなごの害をうけて不作だったために、年貢米をへらしてもらおうよう実地見分を藩に願ひ出たところ、ふとどき者だといってとらえられた、西念新保村の村役五軒の家族たちであつた。藩では、願ひ出をこころよく聞きとどけたふうをよそおつて、八月二十六日、金沢の町はずれにある西念、北安江、南新保という三村をおそつて、村役をとらえて、みなへのみせしめのために拷問にかけ、家財すべてをとりあげた上、五箇山へ流刑にしたのである。

北安江の肝煎十兵衛以下四家族三十名は、五箇山の利賀谷へ向けて数日前に善徳寺を出発し、南新保の肝煎伊右衛門以下六家族四十五名は、あす下梨谷へ行くことになっており、西念の肝煎間兵衛以下三十七名——村を出たときは三十八名だったが、とちゅうで、間兵衛の次男孝蔵が谷間に落ちて行方不明になっていた——は、これから、上梨谷へ行くのであつた。

五箇山、それは能登島と並んで、早くから加賀藩の流刑地とされており、加賀の人びとにとって、鬼でも住んでいるような、恐ろしい所と思われていた。陸つづきというものの、高くけわし

い山々にかこまれて、めったに人の行けぬ深い山奥であり、一年の半ば以上雪にとざされて、外界とは鳥の行ききもかなわぬ異境の地だといわれていた。

じじつ、山は高く、そこへはいるには、城端からのわずかな道をたどる以外になかった。

間兵衛たちが歩かせられたのは、若杉の村を通って、唐木峠と朴峠をこえる、三里半近くある山道だった。朴峠は、現在の地図で見ておよそ海拔九〇〇メートル、すぐ東には一一五〇メートルの清水山、一一三〇メートルの高落場山など、千メートルをこす山々がそそり立っており、その谷間をうねる、文字通りつづらおりのけわしい山道であった。

城端の町を出た一行は、田なかの道を歩きながら、目の前の山々をときどき見た。いかにも高い山並みであった。明るくなるにつれて、白さが増してきた。雲におおわれて、頂を見せない山もある。不安が、人びとの心に重くおいかぶさっていた。

一行が長い間住んでいた西念の村は、山というもののまったくない土地である。大きな城下町金沢の北東にあって、浅野川と犀川との中間にはさまれた、丘ひとつない村であった。人びとにとつて、山というものは、遠くながめるだけのものであった。金沢のすぐわきにある卯辰山も、その奥の戸室山、さらにその奥の医王山も、あるいはよく晴れた日にはるか地のはてに見える白山にしても、すべての山は、四季を通して、ただ美しい景色にしかすぎなかった。

間兵衛の三男松吉がすぎだった昔話は、山うばやてんぐがよく出てきた。おかあやおばあにしてくれるその話は、山奥を舞台にした、ふしぎに満ちた物語だった。

そして、今足を向けている五箇山は、まさに山うばやてんぐの住む所のようであった。その山奥へ、あんなにつもっている雪をふみわけて、はいて行かねばならぬのだ。

「どうせ、おまえら、なだれで死ぬんじや。」

越中への道で送り役のさむらいが笑ったのろわしい声が、みんなの耳によみがえってきていた。一行の足は、ますますおそくなり、足輕のどなり声は、ますますけわしくなった。

松吉は、いつのまにか、友だちの正市といっしょになっていた。正市は組合頭の又右衛門の末っ子だ。家族八人が一行のなかにいる。松吉は小さな声で正市に話しかけた。

「正、ひどい所やってなあ、五箇山は。」

「うん。あの山の奥やもんなあ。」

「おまえ、五箇山へ流されて死んださむらいの話、知っとるか。」

「ああ、寺にいるころ、小僧に聞いた。大槻伝蔵やろ。」

「うん。五箇山へ流されて、五年めに自分で死んだんやてな……。」

ふたりは、この冬の間善徳寺の納屋で雪どけを待っているうち、寺の小僧や働いている人などから聞かされた大槻伝蔵の話をしだした。およそ百年前の話だ。足輕の三男坊にうまれて、寺の小僧だったのがみとめられて、殿さまのへや、づきの坊主になり、二年後にはさむらいにとり立てられ、二十年後には三千八百石をもちうまになった大槻は、殿さまがなくなると、たちまちひきずりおろされ、とうとう五箇山の祖山へ流された。ひとりで流刑小屋にとじこめられてくらしていたのだ。

が、五年めの寛延元年九月十二日（一七四八年）に小刀でのどをついて死んだという話であった。松吉や正市の聞かされたのは、どこまでがほんとうなのか、ひょっとしたら全部がうそかもしれないような、尾ひれのついた話だった。

たとえば、伝蔵が死んだのは、毎晩眠っていると、伝蔵をうらみに思う亡霊があらわれて、「早くこい、いっしょに行こう」といったせいでという話や、伝蔵の所へ会いにきた女の人がなだれで死んで、今でもその日にはだれかが必ず死ぬとかという話まであった。ふたりとも、そんな話はうそだとわかっていた。

しかし、こんな話をしているうちに、五箇山という所に対する不安が、ますます強まってくるのだった。

「なあ、松。おらたち、五箇山行ったら、そんなおとろしい（おそろしい）小屋に入れられるんかなあ。」
いかにも心細そうな声だ。

「いや、ちごうやろうって、おとろしいとったぞ。」

「そんならどんなとこや。」

「さあ……。」

そういわれると、松吉も答えようがなかった。寺の納屋みたいな所だろうか。
ちよっとだまって歩いていたが、正市が別なことをいいだした。

「今でも五箇山にや、さむらいの流し者がくるんやってな。」

「どんなさむらいやろ。」

「こんな所へ流されるんやから、おとろしい顔してわけのわからんことをわめいたり、だれでも見たらすぐ刀^{かたな}ぬいて切ったりするやつとちごうか。」

「そうかなあ。」

「そうにきまっとるわいや。流し者になるちゅうたら、よっぼどの悪者やぞ。」

「うん……。」

「いい者やったら、つかまらんやろ。悪いこととしてつかまったやつでも、おとなしい者なら、町の牢屋^{ろうや}に入れとくやろ。町においとけん悪者やさかい、五箇山に流すんやないか。」

「そんなら、おらたちは何や。」

「え？ おらたち？」

「おらたちも流し者やろ？ 何か悪いことしたか？ 人を殺^{ころ}したり、痛^{いた}めたりしたか。」

「……。」

「おとうも、おかあも、おばあも、だれも悪いことはひとつもしとらんぞ。」

「それはそうや。そやけど、さむらいと百姓^{ひやくしやう}とはちがうんでないか。」

「いつのまにか、ふたりの声は大きくなっていた。足軽^{あしがる}がどなった。」

「やかましいぞ、がきめら。」

ふたりは顔を見合わせて、たがいに首^{くび}をすくめて、すなおにだまった。あの足軽^{あしがる}ももうすぐ五箇

山へ流されるかしらん、そんな目つきや、などと腹立ちまぎれに正市は思っていた。

いっぽう、松吉は歩きながら考えていた。五箇山にさむらいが流されるとしたら、どんなさむらいやろ、もしかしたら、おとうらといっしょに牢につながれとて、おとうに江戸のことやら今度の事件のわけなんか話してくれた、あんなさむらいもおるかもしれない……と。

寺を出てから、もう一刻（二時間）近くたっていた。すっかりあたりは明るくなり、道は城端を離れて打尾の部落をすぎ、いよいよ山の間にはいろうとしていた。左側は見あげんばかりに急な高い山の尾根がつづき、右手は高い峰々に通じる尾根のすがすがしさが、何本も、巨大な根あがりの松の根のようには足をのばしてはりだしているが、その間にはさまれて、これからわけ入ろうとしている谷は、さいわい、低く落ちこんで見える。さっきまで見えていた、白壁のような山々のかげに、わざわざこえやすいような道が、こっそり用意してあるのかもしれない。そんな気持ちかわいたとき、谷にはいる入り口の道のかたわらに、小さな石の地藏さんと、

「南無阿弥陀仏」

と、しっかりきざんだ自然石の碑が、並んで立っていた。地藏さんには、だれがかぶせたやら、小さな笠がのせてある。

年寄りばかりでなく、一行は、一斉にその前にひざまずき、手を合わせた。石地藏のかざらぬやさしい顔は、みなに深い安らぎを与え、石にかたくきざまれた六字は、三十七の心をひとつにまと

